面氏が、多年研究しつゝありし、古代繪卷物風の技巧の漸く練熟の域に入りしことを示し、一面更に自然と人事とに對する觀察の敏活にして、之を表現するの機巧なることを知らしむるもの、加之その畫面に横溢せる感興は優に人を動かすに足るものあり、今年發表せられたる日本畫中に於て群を拔けるものたるは何人も之を認むるところなるべし。

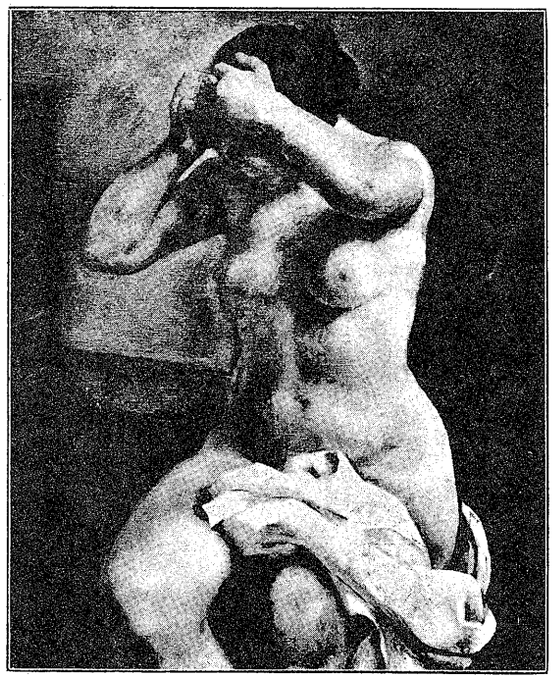
前田青邨氏の技巧的なるに對して、小林古徑氏は、冥想的なり、一は動もすれば筆技の練熟より來る表面的流麗に走ることあるに對して、他は内省的幽深の氣分に富み、象徴的にして時に稚氣を帶ぶることあり。

古徑氏の「阿彌陀堂」は、一見簡單なる構圖と、單純なる色彩とより成る。然かも其内には苦心經營あり、技巧は固より渾成せるものと謂ふべからざるも、却て餘韻の盡きざるものあり。然かも之を單に建築畫として見るも、普通の建築畫の如く無味乾燥ならず、靜寂なる情趣を以て之を包み、微妙なる生氣を以て之を活かせるあり、一個の建築物を描いて、能く幽韻の縹渺たること斯の如くなるを得たるは、素より作家の純眞なる内的閃光の發動するものあるに依ると雖も、其技倆も亦凡ならず、推稱に價すべきものありと謂ふべし。

作品を鑒賞すると同時に、それを通じて作家を觀んことは、吾人の常に心懸くるところなり。吾人は未だ親しく前田、小林の兩氏に接せざるも、今ま作品に現はれたる性格的發露に於て、含蓄の深くして、幽韻の多き「阿彌陀堂」を選びたる所以なり。

其他寺崎廣業氏の「信濃の山路」は、氏が博く古法を究め、自然に參することを怠らず、錬達の筆技を以て、能く日本畫固有の材料を驅使して、一種の効果を擧げたるを賞すべく、下村觀山氏の「弱法師」は自家の本領を守り、莊重典雅なる筆技を示したるを見るも、吾人は今寧ろ新進を推稱するに急なり。

斯くして我賞美章は、最初より今回に及びて、日本畫、洋畫、彫塑、建築及工藝の五科に渉りて、遍ねく之を贈ることを得たるは、吾人の滿足するところなり、終に吾人の此企圖が斯界の重望と信賴とを荷へることを感謝す。



裸かの女　安井曾太郎氏筆

告別

坂井犀水

予近來健康を損し、煩雜なる編輯事務を厭ふの情あり、私に辭意を懷きしが、今回感ずるところあり、俄に意を決し、此號を以て、多年愛護したる本誌を去らんとす。乃ち別に臨みて一言を留め、在任中高援を辱うしたる先輩並に誌友諸賢に謝するところあらんと欲す。

想ふに七年の前、岩村先生の推擧に依りて本誌主幹の任に當るや、誌運甚だ振はず、多少の杞憂を抱かざるにあらざりしも、内は先生其他同人の援助を受け、外は先輩の指導と誌友の同情とに依り、幸に急劇なる發展を爲し、聊か斯界の注目を惹くに至れり、生來の鈍骨を以てして、能く斯くの如くなるを得たるは、時運の力に負ふところあると同時に、先輩誌友の眷顧に依ることを感ずる切なり。滿腔の感謝を表する所以なり。

菲才素より成績の見るに足るものなく、又事々障碍多く未だ理想の萬一を實現し得ざりしは深く慚るところなりと雖も、一意盡瘁、斯界の爲に致したるの微意は敢て之を表白して憚らず。唯顧みて誇榮とし慰藉とするところは、先輩の協助の下に幾多新進の士を推擧し得たる事なり。是れ實に本誌存在の無意義ならざりしを證するに足らん。

今や本誌は更に新進の士を迎へて面目を一新せんとす、前途の多幸を祈る。